

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす  
世界平和のための祭祀を復興させる

### 第三十六回 仏教の矛盾

南出喜久治 (令和8年2月15日記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち  
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

シャカの説いた教へは、輪廻転生から逃れ、靈魂の不滅を否定して涅槃・解脱を説くものです。これは、カースト階級の存在を前提とした教へであり、カーストの差別性を否定してサンガを組織して布教したとしても、これは、ヒンドゥー教の亜流に過ぎません。

インドの民間信仰とバラモン教とが融合したインドの民族宗教がヒンドゥー教であり、シャカは、そのインド・アーリア文化の領域内で生まれ育つて出家し修行して教へ説きました。

シャカの教へは、バラモンの祭祀を否定する自由思想であり、祭祀否定の思想です。現に、シャカは、親を捨て、妻子を捨て、悟りを開いた後においても家族の再構築をしなかつたのです。

そして、カーストのすべての階級に属する人々をサンガに受け入れたものの、その教へにおいては、「六道」を説く矛盾があります。

六道とは、仏教において、衆生がその業の結果として輪廻転生する六種の世界のことです。天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六道です。

これを肯定することは、輪廻転生においてカーストを認めてゐることと同じなのです。

仏(ほとけ)とは、完全な悟りを会得した聖者であり、仏教の開祖であるシャカのことですが、それ以外にも、この悟りの真理、本質、実相を擬人化したものとしてシャカ如来を初めとして多くの如来を生み出しました。これは、シャカが悟りを開いて聖者として認められた後に、弟子や後世の者がシャカの悟りとしての様々な働きを大乗経典の作成の過程において擬人化したものです。

そして、如来となるために、悟りを求めて修行する多くの菩薩も生み出されました。

しかし、悟りを会得することと、人々を迷ひを救ひ、悟りの境地である彼岸に救ひ渡す

衆生済度がすることとは別のことの筈です。悟りの意味も内容も不明ですが、悟りの中に、衆生済度の方法と技術が含まれてゐるといふのであれば、すでになされてゐるはずですが、これまでそれが一度も実現されたことはないのです。

といふことは、悟りと衆生済度の方法と技術とは別のことなので、仏が衆生を済度することはできないといふことです。仏が悟つた同様に、衆生もまた個人的で八正道の修行をして悟りなさいといふ独りよがりなことを言つて突き放すのが悟りを得た者と言へるのでせうか。万人に開かれてゐない真理や悟りといふものは、独りよがりなものです。ここに仏の力で衆生済度するといふ建前には大きな矛盾が露呈してゐるのです。

悟ることが知識であれば、それを明らかにすれば衆生のすべてが救はれるのですが、眞の悟りであれば、それを多くの人と共有して一人でも多くの人を救ふことになります。それを教へないことで自己の悟りの権威を保つてゐることになります。

それを教へないといふことは全く独りよがりの悟りであり、まさに、天上天下唯我独尊です。

曹洞宗を開いた道元は、比叡山での修行中に、人は本来仏性を具へてゐるのに何故に三世の諸仏は発心して悟りを求めたのかといふ根本的な疑問から、臨済宗の開祖である栄西の建仁寺に投じたとされてゐますが、道元は、最後までその答へを出してゐません。

涅槃経には、一切衆生悉有仏性とあり、生きとし生けるものは、すべて仏となれる性質（仏性）を持つてをり、迷妄を払い去つて生死を超えた永遠の真理を会得する「悟り」（菩提心）を得やうとする心を起こし（発心し）、それによつて悟りを得て解脱して「仏」になつたのであれば、その悟りを自己だけに留めることなく、すべての人にそれを会得する方法と内容を惜しみなく明らかにして、あまねく救済するのが大乗仏教であるはずなのに、これまで誰もそれを行つた「仏」は居ないのです。といふことは、これまで「仏」が生まれたとすることは嘘だつたといふことになり、仏教には看板に偽りがあるといふことになります。

嘘をつかねば仏になれぬといふ諺は、このことを言ふのです。

また、弥勒菩薩は菩薩ですから、未だ悟りを得てゐない修行者であるのに、これを仏とするのは、仏の概念に矛盾と混乱があります。シャカ入滅後 56 億 7000 万年後に人間世界に下生して如来となり、すべての人々を救ふとされてゐる菩薩の最高位だとされてゐます。しかし、菩薩はあくまで修行中の者です。一体誰がそのやうなことを決めたのでせうか。虚構の上に虚構を重ねた作り話です。修行中の者がそんなことができるはずがなく、シャカもそんなことを説いてはゐないのです。

そもそも人類が 56 億 7000 万年先で絶滅せずに生存してゐるのでせうか。また、いま直

ぐに救はずにそんな先でなければ人々を救ふことができないのは何故なのでせうか。勿体ぶらないでほしいものです。

心ある有徳の人は、人生を豊かに向上させるために自利・利他を兼ねて日夜励んでゐます。これを菩薩道と言ひますが、様々な菩薩とどこが違ふのでせうか。